

朝清水記

唐土に貧泉あり、和朝に紀の路に毒水あり、あふみぢや醒ヶ井、関の清水、大原は清和井、隴の清水など、代々の歌人の、めでたき言の葉のこゝろふかし、されば往昔の伶聘人も、我此嶋の浪のはなれ鶴とは、放たれ来らずや、灘の塩焼蟹の衣は、著ても見ずや、残れる歌もなく、とゞまれる日記も見えず、ひたすらに神の産給へる、島のそれがまゝの名所とて、柁のかつら伝へ来ぬれど、鳥の跡せし文字もさだかならず、山木森々たれども流るゝ河もなく、湛たる池もすくなし、一島水涸れて、唯岩もる雫、雨の朝の潦、一喝を忍べる便となれり、実にや公のかしこき掟、殊にかく罪あるを遷さるゝの地、宜なるかな、中に就て我住む阿古の浦山は、なをあまさかる鄙の夷、中路漁樵交り隣すれども、貢の塩の跡にたゞえて、朝なゆふなの烟みじかく、夜寒の床の明ると永し、しかはあれど、到景五村に秀で、朝に瞻ば天のはら富士の高根、沖の嶋山の遠きに聳へ、白扇を逆に懸る東海の天と、隠士丈山子が詩にいへり、曾聞法顯三蔵の五天に、漢朝の扇を見たりし心にかよひて、古郷に詠なれし形見は、此山の姿計ぞと、潮に涙にひぢまさる袂も、打覆ふ間に、浪の烟立ふたがれる雲に髣髴として、見えずなりもてゆく、已に夕陽浪にひたせる頃、富賀今崎の釣舟、おのがじゝいどみあひて、家路に帰る歌の聲、心を勞せしむる媒となれり、猿あらば、豈べき山峡後に峙、鶴あらば、巢へ怪松門に存せり、月雪の眺望、あはれ罪なくて見まほし、松の木はしら、竹あめる牆、不破にはあらぬ茅庇、荒行まゝに守り捨て、夏待つ宿の生瓢、雨に軒吹伊豫すだれ、廬に近き岩嶂に、藤蘿を伝へる飛瀧を見つ、是や葦康が山沢の水に、元芝が黄州の竹をもとめて、昼夜を捨ぬ篋をかけたなり、杜子の浣花溪に謫せられて、奴僕が運ぶ巫峡の水、消渴之疾を安して、竹竿濃々として、細川流と作れるなど、坐に流泉啄木之曲、枕に伝ふ松の嵐、棘の中を潜る水のみさほに、落る竹の滴り、彼に恥ぢ彼を友とす、予は本武陵画工の庸人、されば三日詩を言されば、口荆棘を含むと、年月の手馴ぐさも、忘草に根をかへて、朽木蟲の跡のごとくに、消もて行もはかなし、せめてはと、巨勢干枝の古きあとを、尋ねまほしきに、彩種齟るに疎なれば、丹青器に尽き、紙筆机に絶ぬ、高然暉か重れる山々、季唐が野飼の牛も、目前に見、傍になれ、行かふことの静なるにつけては、捨へき時に術をも得ぬべき、かぞふれば、齡半百に向して、懶惰日にそひてまさる、斧を取、鋏をうつ勢ひもなければ、しばし世わたることわざに、鄙嗇欺言の商家となりて、軒一宇の罍イホリを築、其中に陶朱公が富貴をこめて、伯倫か酒、陶潜か米をかさね、木樵かカシヨネに宛て、漁叟か簑に貸し、得る時は、徐福か船をたのみて、蓬萊に不老の葉を俟つ、捨る時は、孫農が一束の薬をも貯ず、姑蘇台烏棲て、阿房宮狐の壻に空く、篋も竹朽なば、水は岩根の主となりて、幾世絶ぬべき、

埋むべきうき身はいかにながらへてけふまでむすぶ苔の下水

于時元禄壬午春

散人牛麿、執筆於阿古邑茅舎

南方海島志、三宅島村里部曰、阿古邑、在島之卯辰

右清水記一卷、牛麿散人とは画工英一蝶がことにて、遠き島辺の棲におゐて、書つらねつゝ、不二の絵に添て伝へたるを、多賀孤水【一蝶孫】の許より写し得られし由にて、武濂のぬしの、箱にひめ置れしを、今年天明癸卯初秋に、服元のもとめによりて、うつし終ぬ

(参照)「元禄壬午」は元禄十五年(1702)

「天明癸卯」は天明三年(1783)

「服元」および書写した人物ともに未詳